

## メソポタミア初期王朝期の丸彫人物像

### ——そのエジプト的要素——

小野山 節

#### 1 メソポタミア丸彫人物像の研究史から

エジプトだけが高度な文化の唯一の発生地であると主張した文化伝播論は、1920年頃から1930年代初めにかけて行われたシュメール都市の発掘によって成立し難いものとなった。メソポタミア南部すなわちバビロニアにおいて、紀元前四千年紀にエジプトよりも古く栄えたシュメール文明の存在が明らかにされたからである。そして1931年には南メソポタミア先史時代における諸文化の呼称とその前後関係を、ウバイド期—ウルク期—ジャムダト=ナスル期とすることに研究者の合意がえられた[Speiser 1941]。さらにウルクの発掘が進むと1930年代半ばには、先王朝時代末から第I王朝初めにかけて、エジプト文化一元論とは逆に、メソポタミアからエジプトへの強い影響が認められその意義が議論されるようになった[Frankfort 1951]。しかしメソポタミア・エジプト両文明の重要な構成要素である彫像類についてみると、1930年代初めには、メソポタミアの前四千年紀に属する丸彫人物像の存在はほとんど認識されていなかったし、また後に初期王朝期とよぶことになるサルゴン前の三千年紀に属する丸彫人物像も数例しか知られていなかった。

メソポタミア初期王朝期の丸彫人物像に関する資料が一挙に増加して、メソポタミア彫刻史についての本格的な議論を可能にしたのは、バビロニアの北に接する Diyala 河流域の都市遺跡 Tell Asmar と Khafajah およびユーフラテス河中流域の都市遺跡 Tell Hariri の発掘における1930年代と1950年代の成果である。Tell Asmar と Khafajah の発掘はシカゴ大学オリエント研究所が、Henri Frankfort 隊長のもとで1930年から1938年まで Tell Asmar, Khafajah, Ishchali, Tell Agrab の4都市遺跡発掘調査の一環として行ったもので、次の2冊によって彫刻に関する資料の報告書が刊行された。

Henri Frankfort *Sculpture of the Third Millenium B.C. from Tell Asmar and Khafajah*, (OIP XLIV), Chicago, 1939.

Henri Frankfort *More Sculpture from the Diyala Region*, (OIP LX), Chicago, 1943.

一方、Tell Hariri では、偶然に彫像が一個掘りだされた機会をとらえて、フランス政府が André Parrot 隊長のもとで1933年に発掘を開始した。発掘を始めて間もなく、この都市遺跡

Tell Hariri がシュメール王名表の大洪水後第10番目に記された都市 Mari であることが判明するとともに多くの丸彫人物像を発見した。発掘は1940年から中断していたが、第二次世界大戦後、1951年に再開されてさらに多数の彫像を掘りだし、1956年からは正式の発掘報告書の刊行が始まった。問題の彫像にかんする報告は、次の2冊の神殿の報告に含まれている。

André Parrot *Mission archéologique de Mari (I) : Le temple d' Ishtar*, Paris, 1956.

André Parrot *Mission archéologique de Mari (III) : Le temples d' Ishtar et de NINNI-ZAZA*, Paris, 1967.

シュメール文明に関する研究資料が増加するにつれて、シュメール美術の発達にも関心が向けられるようになった。残存部分の少ない煉瓦建築、わずかな痕跡しか残っていない絵画に比べると、彫刻はシュメール美術に関する恰好の資料であった。そして彫刻のなかで、丸彫像は両手を胸の前で組合せるという礼拝者の姿勢を表すものが多く、エジプトの丸彫像とも、ギリシア・ローマの丸彫像とも異なる独特の姿を示していた。シュメール文明の性格を議論するとき、これらの丸彫礼拝者像は重要な役割を担う欠くことのできない要素と考えられた。

シュメールの丸彫人物像を検討するにあたって参照することができた書物の主なものを以下に挙げておきたい。これらの書物の基礎にある論文をも問題にすべきであるが、小論では定説ないし通説の検討を目的とするので、個々の論文で発表された異説については別の機会に取上げたい。

Christian Zervos *L'art de la Mésopotamie*, Paris, 1935.

C. Leonard Woolley *The Development of Sumerian Art*, London, 1935.

Zervos の書物は Diyala 河流域の遺跡や Mari 出土の資料を使っていない。Woolley の書物は新資料を数点使用しているが、Frankfort による初期王朝期の3期編年が発表される前段階の考察であるため [Frankfort 1936]、新資料の編年的位置付けが適切でない。

Werner Speiser *Vorderasiatische Kunst*, Berlin, 1952.

Henri Frankfort *The Art and Architecture of the Ancient Orient (The Pelican History of Art)*, Harmondsworth, 1954.

André Parrot *Sumer (L' Univers des Formes)*, Paris, 1960 (青柳瑞穂・小野山節訳『シュメール』〈人類の美術〉新潮社, 1965).

J.A.H. Potratz *Die Menschliche Rundskulptur in der sumero-akkadischen Kunst*, Istanbul, 1960.

Johannes A.H. Potratz *Die Kunst des Alten Orient, (Springers Handbuch der Kunstgeschichte)*, Stuttgart, 1961.

Leonard Woolley *Mesopotamia and the Middle East (Art of the World, VII)*, London, 1961.

これら6冊の書物では Frankfort と Parrot の概観が特に重要である。Frankfort は Diyala 河流域4都市の、Parrot は Mari のそれぞれ調査隊長であったからである。しかし1958年に、ウルクにおいてシュメール丸彫人物像の認識を大きく変える発見があった [Lenzen 1960]。丸彫像の発見以後、このウルク期またはジャムダト=ナスル期の人物像をいかに評価するかが、

シュメール彫刻史における重要な課題となった。

Eva Strommenger *Fünf Jahrtausende Mesopotamien*, München, 1962 (*The Art of Mesopotamia*, London, 1964).

Anton Moortgat *Die Kunst des Alten Mesopotamien*, Köln, 1967.

André Parrot *Assur (L' Univers des Formes)*, Nouvelle édition, Paris, 1969. Troisième partie, Supplément Sumer-Assur, mise à jour 1969.

Winfried Orthmann *Der Alte Orient (Propyläen Kunstgeschichte, Bd. 14)*, Frankfurt am Main, 1975.

Pierre Amiet *L' Art antique du Proche-Orient (L' Art et les Grandes Civilisations)*, Paris, 1977.

Eva Andrea Braun-Holzinger *Frühdynastische Beterstatuetten, (Abhandlungen der Deutschen Orient-Gesellschaft Nr. 19)*, Berlin, 1977.

André Parrot *Sumer (L' Universe des Formes)*, Nouvelle édition, Paris, 1981.

Moortgat では、彼自身が1958年から1976年にかけて発掘した北東シリアの Tell Chuëra の丸彫礼拝者像が加えられた。Parrot 補遺編(1969), Orthmann (1975), Amiet (1977) などでは Nippur 発掘品が加えられたけれども、シュメール彫刻史の理解を大きく変革するものではなかった。Parrot の Sumer (1981) は1969年の補遺編を含めて改訂したものである。

さて、先に挙げた十数冊の古代オリエント美術史を通観して感じることは、メソポタミアの丸彫人物像の成立と発達を一貫してメソポタミア文明の、さらに限定するとシュメール文明の造形力から説明しようとする著者たちの姿勢である。メソポタミア文明と並んで、紀元前四千年紀末から三千年紀前半にかけて独自の文明を創造したエジプトとの関係については、先に述べたようにジャムダト=ナスル期のメソポタミア文明が先王朝時代末期のエジプトに大きな影響を与えたことが議論されることはあっても [Frankfort 1951], その逆、すなわちエジプト文明のメソポタミア文明に対する影響はほとんど問題にされていない。

しかしメソポタミア初期王朝期の丸彫人物像を観察すると、エジプトの丸彫人物像に比較的好く認められる特徴をもつ彫像が存在することに気付く。それらをエジプト的要素として抽出し、メソポタミア初期王朝期における丸彫人物像の成立状況を考察する端緒としたい。

そのエジプト的要素というのは、立像の左足を少し前に出す姿勢、倚坐像、女性の頭髮の処理などであって、かつて20年ほど前、メソポタミア美術を概観する機会を与えられたとき、エジプトからの影響によるものと簡単に述べたことがある [小野山 1975]。この問題は、エジプトとメソポタミアの、あるいは西アジアの関係を議論するとき、エジプトの影響を強調する Wolfgang Helck も、西アジアに認められるエジプト的要素に着目してその意義を詳細に論じた大冊を刊行しているにも拘らず、取上げていない問題である [Helck 1971]。

なお小論は、早稲田大学で行われた1993年12月21日の第31回シュメール研究会において、「メソポタミア初期王朝期の彫像にみられるエジプト的特徴」と題して発表した。

## 2 左足前の立像——エジプト的要素(1)——

メソポタミアの丸彫人物像は、その形から立像(台坐をもつものともたないもの)、椅子に腰を掛けている倚坐像(男女が一对となつて腰を掛けている多分夫婦の倚坐像を含む)、坐像の3種類に大別することができる。坐像には、膝を揃え脚を折曲げて腰をおろす正坐の姿勢、腰をおろして両膝を立てた姿勢、腰をおろし両膝を交叉させて立てた姿勢、両膝をついて腰をやや浮かした姿勢、立て膝の姿勢、胡坐などさまざまな形がある。

ウルク期やジャムダト＝ナスル期に属する丸彫人物像は、立像が現在のところ1例を除いて台坐を伴わず、倚坐像はなく、坐像は正坐と腰をおろして両膝を立てた姿勢とに限られている。そして初期王朝1期に属する丸彫人物像はまだ発見されていない。

初期王朝2・3期の立像は台坐の上に立っている(図4・9・10)。ジャムダト＝ナスル期の台坐をもつ Khafajah 出土の1例も、その台坐は粗雑なつくりの小円形で、台坐としては不明確であることから判断して、丸彫人物像に台坐を付けるという考え方そのものを外来的の要素と認めることもできるが、ウルク期やジャムダト＝ナスル期の丸彫人物像が少数例しか知られていない現状では、台坐を外来的の要素と断定することは差控えておきたい。

Mari 出土の立像には、発掘されたときかなり小さく破壊されていた断片を接合して復原したものが多し。しかし、台坐と立像とは一体のものとして石塊から彫り出されたもの、すなわち台坐を別づくりとして立像を据えたものではないので、台坐に残る足部を観察することによって、左右の下腿の関係を正確に知ることができる(図6・7・8・9)。

左足と右足の位置を基準にすると、図8のように両足先が揃っている両足並びと、図6・7・9のように左足を少し前に出した左足前の2種類に大別することができる。左足爪先と右足爪先の前後の間隔が比較的狭いものも広いものもあるが、今はこの間隔は問題にしない。そして両足並びの台坐には、台坐の後方に両足の踵に接して立像を支えるための板状削出しがあることが多いのに対して、左足前の台坐では、前に出した左足の後に支柱を削出して立像のバランスを取っているものが大部分のようである。実物を詳細に観察して検討することができないので、細部にわたる考察を行い、Mari 出土の立像において両足並び像と左足前像とがどのような比率であるかなどにつき数字をあげて具体的に示すことは残念ながら不可能である。また写真と説明文だけでは、石膏による補修部分を精確に知ることはできないので、重要なことではあるがこの点の精確な検討も断念せざるをえない。ただし写真と簡単な説明による限り、Mari では左足前の立像が多いように思う[Parrot 1967]。

台坐の形には、楕円形ないし円形(図7・8)と縦長と横長の長方形と方形があつて(図6)、左足前と両足並びがそれぞれどの形の台坐であるかは決められないが、楕円形でも長方形でも横長台坐が両足並びの立像である場合が多いようである。

Mari 出土の Nani の立像は、左足前の立像で板状の支えをもつ例である。Mari の彫像類が



エジプトとメソポタミアの紀元前三千年紀前半の丸彫人物像

図1. Zoser 王倚坐像(エジプト第Ⅲ王朝)Saqqara 階段式ピラミッド出土/2・3. Sepa と Nesames 立像(エジプト第Ⅲ王朝)伝 Saqqara 出土/4. Eshnunna 王立像(メソポタミア初期王朝2期)Tell Asmar の方形神殿Ⅱ出土/5. 坐像(メソポタミア初期王朝2期)Khafajah の Nintu 神殿Ⅴ出土/6・7・8. 台坐(メソポタミア初期王朝3期)Mari の Ninni-zaza 神殿出土/9. 振分け髪の立像(メソポタミア初期王朝3期)Mari の Ninni-zaza 神殿出土/10. Lagash の Entemena 立像(メソポタミア初期王朝3期)Ur 出土。

メソポタミア初期王朝3期に属するのに対して、Diyala 河流域の Tell Asmar や Khafajah から発掘された丸彫人物像には、Mari よりも古い、初期王朝2期に属する例が含まれている。その1期には丸彫人物像の資料が知られていないので、現在のところメソポタミア初期王朝期丸彫像の起源を考えるうえで、これらは特に重要な資料である。

Tell Asmar の方形神殿Ⅱから出土した15体の一群がある。発掘調査隊長であり報告者の執筆者でもある Frankfort は15体のうち、眼の表現が格別大きくて特異で、他の像より背の高い男女各1体の像を豊饒の男神 Abu(図4)と「地母神」と関連のある女神とを象ったものであると考えた[Frankfort, 1939, 1954]。Parrot はこれらの2像について神像か礼拝者像か断定するのをためらっているが[Parrot 1960, 1981]、他の多くの研究者が主張するように礼拝者像とみるのが妥当である。この15体のうち足部を欠く5体と膝をつく坐像で台をつけていない1体を除外すると、今問題にしている足の形は9例全部が両足並びである。

Diyala 河流域の他の神殿から出土した初期王朝2期の丸彫人物像立像のなかにも、左足前の姿勢をとるものは、現在のところ知られていない。初期王朝3期になっても、報告書による限りわずかに4例(Nos. 171, 173, 174, 232)が図版に示されているに過ぎない。そのうち3例は台坐のみで、それらがどのような立像を支えていたかは分からないが、No. 232は Khafajah の Nintu 神殿Ⅵから発掘された好例である。上記の発掘報告書[Frankfort 1943]では初期王朝2期に属するものと考えられたが、後に3期に改められた[Frankfort 1954]。カウナケスをまとい、頭も顎も頬も剃髪しているために、Frankfort はこの像を僧侶と断定したが、これは誤りであろう[小野山 1975]。この立像の台坐は隅丸方形で左足を前に出し、後方に板状の支えを備えている。

左足前の姿勢をとる丸彫人物像は、ユーフラテス河中流域の Mari から直線距離で370kmばかり東へ進んで Tell Asmar 附近までくるとかなり減少するものと考えることができる。

それでは Diyalal 河下流域から南に広がるシュメール文明形成の中核的基盤であったバビロニアでは、初期王朝期に丸彫人物像の足はどのように表現されたか、メソポタミアの各都市から礼拝者像を Enlil 神殿に奉納したとみられる Nippur の出土品を除いて、バビロニアで製作された立像をみてみよう。発見された丸彫人物像は、それぞれの出土地の都市で製作されたものとは限らないが、その多くは発掘された都市において製作されたものと考えられるので、ここでは明白な Nippur の例だけを除外することにして、この問題は将来の検討課題としたい。

バビロニア初期王朝期の丸彫人物像の類例は、Nippur 出土品を除くと意外に少ない。そのなかで足の形が分かる例はさらに少なくなる。Lagash のエンシ Entemena の立像が(図10)、頭のない姿で Ur のジググラトの内門前から発掘されていて、足は両足並びの表現である[Woolley 1955]。Tello 出土の小像も、大英博物館が所蔵する出土地不明の女性立像も両足並びである[Parrot 1948]。バビロニア出土のこれら3例に共通する点として、下腿および足の表現の貧弱さと足の後から左右に延びる支えの頑丈さとが目立つことが挙げられる。

他方, Mari の北方約200kmにある北東シリアの Tell Chuēra で発掘された立像は, 両足並びで丈夫な支板を備えている [Moortgat 1965, 1967]。ユーフラテス河の支流を北に遡った山麓にある Tell Chuēra の位置から考えると, Mari の立像の表現に類似する点が意外に少なく, Diyala 河流域の立像に共通する要素の多いことが注目される。

ウルク期やジャムダト=ナスル期のメソポタミアには左足前の丸彫人物像はない。丸彫人物像の資料が全く知られていない初期王朝1期を経過して, 2期には Diyala 河流域に両足並びの丸彫人物像が出現し, 3期になると, ユーフラテス河中流域の Mari に左足前の丸彫人物像がかなり多く見られるようになる。左足前の立像は Diyala 河流域にも波及しているが, 現在のところバビロニアでは両足並びの立像しか発見されていない。神の前に立って神を礼拝するときの姿勢として, 左足を前に出すのは不自然である。Mari において左足前の丸彫人物像が多くつくられ, そしてこの姿勢の丸彫像が Diyala 河流域には少なく, バビロニアではなお知られていないとすると, 左足前の礼拝者像の形は, 礼拝者ではないエジプト丸彫人物像の影響を受けて Mari においてつくられたものと判断するのが自然であろう。Mari は地理的にエジプトと最も接しやすい位置にある。エジプトにおける左足前の丸彫人物像(図2)は第Ⅲ王朝時代から紀元前4世紀まで一貫して行われ [Stevenson Smith 1958, Vandersleyen 1975], 前7世紀におけるギリシアのクーロスの成立にも影響を与えている [村田 1974]。

バビロニアでは両足並びの足部表現が, 初期王朝期に続くアッカド時代の Naram-sin 像, 新シュメール時代の Gudea 像, 前三千年紀末の Mari の支配者 Ishtup-ilum 像などに引継がれている。

### 3 倚坐像と夫婦倚坐像と坐像——エジプト的要素(2・3・4)——

メソポタミア初期王朝期には立像とともに, 類例は少ないけれども, 椅子に腰を掛けた倚坐像, 稀に男女一対が並ぶ夫婦倚坐像, 脚を胡坐に組む坐像, 腰をおろし脚を半ば立てて交叉させた坐像, 立て膝の坐像がつけられた。ここで問題にするのは, ウルク期やジャムダト=ナスル期の丸彫人物像には見られなかった倚坐像と夫婦倚坐像と胡坐の姿勢をとる坐像とである。

倚坐像が登場するのは初期王朝2期からであって, Diyala 河流域の発掘報告書によると, 2期に属するもの9例, 2期末から3期にわたるもの5例である。この例数は報告書の図版や記述から確実に倚坐像と判断できるものであって, 実物を観察するとさらに多くなると思われる。ここでは第1期の空白期において, メソポタミア初期王朝2期に再び丸彫人物像が製作され始めた時期からすでに倚坐像があったという事実が重要である。初期王朝3期の Mari でも, 報告書から15体分を認めることができる。Mari の倚坐像のなかで各種の書物にもよく引用される代表的な例は, 都市 Mari の監督 Ebihil の像である。この像は, 籠細工の台に腰を掛け, 胸の前で両手を組合せて神に祈る姿勢を象ってあって, 頭髮だけをそり, 顎ひげと頬ひげはたくわえている。この倚坐像の椅子は籠細工の表現だけれども, 木を組立てたか

葦を束ねて組上げたものと考えられる特徴を示す椅子もある。このような状況は Mari だけでなく、Diyala 河流域においても同様である。バビロニアで発見された倚坐像は Dudu 像が有名であって、出土地は確かではないが、Tello と推測されており、現在イラク国立博物館に所蔵されている。Dudu 像は完全な剃髪である。

夫婦倚坐像はごく少数例が知られているだけである。Mari から 1 例、Khafajah から 2 例、バビロニアでは Nippur から 1 例。Khafajah 出土 2 例中の 1 例は粗雑なつくりのために男女を表現したものがどうか判然としないので、これと Nippur 例を除外すると、夫婦倚坐像は Mari で 1 例、Diyala 河流域で 1 例しか出土していないことになる。Diyala 河例は Khafajah の Sin 神殿Ⅷから出土したもので、初期王朝 2 期に属する。2 例ともに男を左、女を右に座らせており、Khafajah のは男が右腕で女の右肩を抱き、Mari の像では男が左手で女の右手を握っている。残念ながら Mari の男の右腕が欠落しているために、Khafajah と同じように女の肩に手を掛けていたかどうか分らないが、エジプトとは多くの場合に男女の位置が逆であり、肩に手をかけるのが女である点も異っている。Frankfort はエジプト夫婦像を参照しているけれども [1939]、メソポタミア夫婦像の男女の位置がエジプトと逆であることは問題にしていないうし、またメソポタミアの夫婦倚坐像の形がエジプト彫刻の影響のもとで成立したとは考えていない。ただし Nippur の夫婦倚坐像では、男が右、女は左に置かれ、男が左腕で女の肩を抱き右腕で女の左腕を握っている。

胡坐に組んだ坐像もまた、エジプト彫刻の中で重要な位置を占めている。A. Mariette が 1850 年に発見して現在ルーヴル美術館に所蔵する第 V 王朝時代の書記像が、その写実的表現によってエジプト美術に対する学界の、さらには一般の認識を大きく変革して以来、胡坐像もエジプト彫刻の重要な一構成要素と認められている [ミハエリス 1927]。その胡坐像をメソポタミアにおいても Khafajah 初期王朝 2 期に見ることができる。この坐像は Khafajah の Nintu 神殿 V から発掘された 9 体の一括遺物のうちの 1 体である。9 体のうち 8 体が立像で、8 体のうち 1 体だけが完全な剃髪でカウナケスを下半身にまとい、左足をやや前に出して後方に支板をもつ台坐を伴っていて、表現が写実的な傾向をもっている。他の立像 7 体は現存する限り頭髪、顎ひげ、頬ひげを残し、両足並びで、一般に幾何学様式といわれる固い表現である。この幾何学様式の表現法で 1 体だけ姿勢の異なる胡坐像が製作された(図 5)。特にその脚部の表現はぎこちなく、いかにも一彫りごとに手本を見ながら刻んだもののように見える。胡坐像は現在のところ Mari では知られていないが、著名な Ubaid 発掘の Kurlil 像は、完全に剃髪して表現は写実的傾向を示している [Hall & Woolley 1927]。バビロニアではこの外に Tello から出土した都市 Umma の Lupad 坐像がある [Parrot 1948]。なお Copenhagen の国立彫刻美術館に出土不明の胡坐像があって、これらと同類に取扱われることがあるけれども [Moortgat 1967]、筆者は真偽についての詳細な検討を要すると考える。

ここに述べた倚坐像、夫婦倚坐像および坐像のなかでアッカド時代以降に継承されるのは、例えば Gudea 像に見られるように倚坐像だけである。

## 4 頭髪と顎ひげ——エジプト的要素(5・6)——

Mari の発掘隊長である André Parrot が、この女性彫像の頭部をみたとき、恐らく即座にエジプト彫像との関連を考えたのではないかと推測されるのが、これから問題にしようとする立像の髪形である(図9)。報告書でも「エジプト髪形的女子(?)像」と命名され、J.Vandier の“*La Statuaire égyptienne*”, 1958 のなかで類似の髪形をもつ彫像の図版が指示されている。そして Parrot は Frankfort が“The Birth of Civilization in the Near East” 1951 においてメソポタミアからエジプトへの影響を示す証拠としてあげた箇所を示し、これは両地域の影響が相互的なものであったことの新しい証拠の発見であると注記している [Parrot 1967]。しかしその後この問題を改めて議論したことを聞かないし、また1981年の“Sumer” 新版でもこの問題に全く言及していない。

エジプト髪形というのは頭の真中で髪を両側に等分し、束ねて耳の後から両肩の前に出し比較的短い箇所で切った形であって、両端には簡単な留具らしいものの表現が認められる。仮に「振分け髪」としておこう。エジプトのように鬘であったかどうかは分らない。

Parrot が報告書において「女子(?)像」と疑問を付したのには理由がある。頭部の表現は女性を連想させるけれども、この立像は上半身を裸で表わす男性の通則によっているからである。Parrot も発掘直後にはこの像を女子像と考えていたし [Parrot 1953], Amiet も女性とみていて [Amiet 1977], 特に男子とすべき議論を展開した研究者を知らないので、取敢えず本論では、この像を女性として取扱う。

エジプトの女性立像として、Parrot が Vandier の著書から振分け髪を参照した像は6例であって、2例が第V王期、2例が第VI王期、2例が第XII王朝に属するものである。他のエジプト美術史を参照すると、さらに古い第III王朝に属する男女の一對 Sepa と Nesames のうちの Nesames 女性像(図3)にも類似の振分け髪をみることができるので [Vandersleyen 1975], この髪形は少なくとも第III王朝の時代まで遡ることができる。ただしこの振分け髪の彫像は、メソポタミアでは現在のところ Mari に限られている。

メソポタミア初期王朝期の丸彫人物像にみられる髪形をエジプトの彫刻のそれと比較しているうちに、先に立像で問題にした Tell Asmar 出土の王を表す礼拝者像の顎ひげが目にとまった(図4)。この王立像は蛇腹につくった立派な顎ひげをつけている。Tell Asmar の方形神殿Ⅱから出土した一括遺物の彫像15体のうち顎ひげの形の分るものが11体あり、そのなかで蛇腹形顎ひげは5例である。他の6体中顎ひげを輪郭だけ象った1例を除いて他の5例は蛇腹形に格子切目や縦のジグザグ文を加えている。すなわちわざわざ顎ひげであることを示そうとしているように思われる。すると蛇腹形は何か。それはエジプトの王が儀式的のさいに王権の象徴として装ったといわれる付けひげ(図1)に原型があって、蛇腹形は螺旋状に巻いた紐の形に由来するのではないかと推測する。

そしてエジプト丸彫人物像に表わされている王の儀式用付けひげの最古の例を、階段式ピラミッドの被葬者である第Ⅲ王朝の創始者 Zoser を表現した倚坐像の顔に見出すことができるのである。王の付けひげそのものは浮彫の表現によると第Ⅰ王朝においてすでに見られるようであるが、小さく表わされた浮彫の表現から Tell Asmar の王の蛇腹形鬚ひげは生れないであろう。

## 5 Eshnunna の王と王妃の礼拝者像

Diyala 河流域の遺跡 Tell Asmar は古代都市 Eshnunna であって、これまでしばしば取上げてきた方形神殿Ⅱ出土の一括彫像のなかで一段と大きい男女一對の丸彫人物像は、礼拝者としての王と王妃を象ったものと考えることができる。なぜこの王と王妃の像が大きくつくられたかを考え、さらにメソポタミア初期王朝期の丸彫人物像に、これまで見たようなエジプト彫刻の影響が認められるとすると、Eshnunna の王と王妃の像だけがもつ特異な要素が何を意味するか、それらをもとにエジプトとの関連を探ってみたい。

まず第一にこの王と王妃の立像が特異な点は、他の礼拝者立像に比べて一段と大きくつくられていることである。確実に高さの分る像を比較してみると、普通の男子礼拝者像 6 体が 29cm から 55cm あるのに対して、王の立像は 72cm、1 体だけの女子礼拝者像の高さ 34cm に対して王妃の立像は 59cm とこの王と王妃の立像は格別に背が高い。このことは他の像と比較したとき、特に眼を大きくつくって目立たせてあることと関係のないことではない。さらにこれらの像は、狭い額、角張った胸、細い前膊、異常に太くて角張った脚につくられており、一群の他の像もその表現法は大同小異であって、Frankfort が強調したように、幾何学様式の原則によって製作されたものである [Frankfort 1939, 1954]。そして幾何学様式の表現法では、その人物の役割によって像の大小が決められるものである。Diyala 河流域においては、初期王朝 3 期が写実主義の時代であって、2 期はその移行期に当たっている [小野山 1975]。第一の特異な点は、Diyala 河流域の初期王朝 2 期の時代思潮にふさわしい現象であると理解することができる。

第二点は王立像の台坐の正面に獅子頭の鷲アンズーが浮彫で表現されていることである (図 4)。メソポタミアでは、立像や倚坐像の台坐到文字や文様を刻んだり、あるいは浮彫で表わしたりすることは殆どない。ただ新シュメール時代に、Gudea の息子である Lagash のエンシ Urningirsu が Ningizzida 神に捧献する立像をつくったとき、供物を捧げる数人の従者を浮彫で表現した例が知られているだけである。初期王朝期に属する丸彫人物像の台坐では、Eshnunna 王の例が唯一のもので、シュメールには無い表現形式である。したがって、メソポタミア初期王朝期の丸彫人物像にエジプトの影響が認められるならば、この表現形式の由来もエジプト彫刻に求める方が自然であるというのが筆者の意見である。そして獅子頭の鷲は当時のメソポタミアにおいて覇権の象徴であったと考えている。このことについては 1980 年

12月21日に静岡女子大学で行われた第12回シュメール研究会で発表したことがある。別の機会に詳しく論じたい。

台坐正面の浮彫をエジプト彫刻の模倣とみると、Eshnunna の王はエジプトのどの彫刻に範を求めたのだろうか。それは蛇腹形顎ひげの原型と考えられる付けひげをもつ Zoser 王の倚坐像であろう。この倚坐像台坐の正面には象形文字で王の名が表わされている(図1)。同じく第Ⅲ王朝時代の左足前の姿勢をもつルーヴル美術館所蔵の Sepa 立像では(図2)、記銘がすでに台坐の上面にあり、第Ⅳ王朝以降この台坐上記銘が一般化するようである。Eshnunna 王立像の台坐の正面浮彫は Zoser 王の倚坐像を手本にして施された可能性がますます高くなる。Zoser 王がエジプト全土に強力な支配体制をしいたことを考慮に入れると[小野山 1966]、Eshnunna 王が Zoser 王に肖りたいと考えるのは当然であろう。Zoser 王像以前では、Hierakonpolis から出土した第Ⅱ王朝の Khasekem 王倚坐像がその台坐の正面と側面に王が倒した多数の敵兵の姿が陰刻されており[Vandersleyen 1975]、Abydos で発見された第Ⅰ王朝に属する男子立像の円形台坐の正面にも図文の陰刻が認められるが、Eshnunna 王の台坐浮彫に最も近いのは Zoser の正面である。

三番目に注目されるのは王妃像の台坐上に設けられた嵌めこみ小像である。小像は下腿部だけが残っていて、報告書では女性の子供像の復原形が示されたが、この小像が女か男かは決められない。しかしここに子供像が嵌めこまれていたことは確実である。大人の丸彫像に子供像を副える形式もメソポタミアでは他に例の見られないものであり、エジプト彫刻において子供像を伴う最古の例がどれかは知らないけれども、一般に第Ⅳ王朝には子供を伴う家族群像の形式が出現し、古王国時代を通じてかなり行われたようである[Vandier 1958, Aldred 1980]。エジプトにおいて子供を伴う丸彫人物像が第Ⅳ王朝よりも古くから行われた可能性は十分に考えられることであって、Eshnunna 王妃像の子供もその影響のもとで製作されたものと考えて、それほど不自然なことはないであろう。

## 6 エジプト彫刻のメソポタミアへの影響

新しい観点からメソポタミア初期王朝期の丸彫人物像を観察すると、従来メソポタミアのなかだけで造形の契機が考えられてきた丸彫人物像にも、以上に述べたように、その構成要素には、エジプト古王国の丸彫人物像にみられる要素の導入が認められるのである。それらの要素は、立像のうち左足を前に出す像(エジプト的要素1)、倚坐像の存在(エジプト的要素2)、とくに夫婦倚坐像(エジプト的要素3)、胡坐像の存在(エジプト的要素4)、振分け髪の毛(エジプト的要素5)、蛇腹形顎ひげ(エジプト的要素6)である。この外に特殊な例として、ということは将来これと同類の資料が発見される可能性がほとんどないと考えるからであるが、Eshnunna 王立像の台坐正面に見られる浮彫と王妃の子供づれ立像をあげることができる。この2つにもエジプト的要素の番号を付けることが許されるならば、(7)と(8)ということになる。

エジプト的要素がメソポタミア初期王朝期の丸彫人物像にこれだけ多く認められるならば、初期王朝期の文化を構成する他の文物のなかにもエジプト的要素がないかどうかをさらに探ることが次の課題となる。そしてその成果は、シュメール文明が衰退したのちに創造されるシュメール=アッカド文明の形成過程を明らかにするうえで重要な意味をもつ筈である[小野山 1975]。メソポタミア初期王朝期文化へのエジプトからの影響が、1930年代以降に議論されなかった訳ではないが、今それらを取上げる余裕がないので、メソポタミア初期王朝期文物のなかでエジプトに見られる類似した現象として、かつて Gordon Childe によりがらがら(楽器)、王墓にみられる殉葬、舟の副葬、王権のあり方などが挙げられたことだけを紹介するにとどめたい[Childe 1952]。

上述の検討において、メソポタミア初期王朝期の丸彫人物像にエジプト古王国の彫刻との共通性が認められるときには、現在の編年上ではエジプトが古いことや、彫像のいくつかの要素が長期間にわたってエジプトにおいて継承されていることから、すべてエジプトからの影響によって説明してきた。逆の場合、すなわちメソポタミアからエジプト彫刻への影響は考慮する余地はないかどうかという問題を検討することなしにすましてしまった。しかし、このことは1910年代から1930年代半ばまで世界的に流行したエジプト文化一元論の再興を意図するものではない。殉葬をともなう王墓の葬送がどの古代文明においても文明の形成過程において共通に認められる現象であり、文明間の影響関係の認められないことはすでに詳しく論じたところである[小野山 1962, 1963]。

編年の上でこの問題に直接関連があるのは、メソポタミア初期王朝2期とエジプト第Ⅲ王朝の創設とどちらが古いかということである。上で述べたようなエジプトからの影響と判断する背景には、エジプト第Ⅲ王朝の始まりが初期王朝2期よりも古いと考える通説によっている。著しく専門分化した現在の学界において、エジプトとメソポタミアの双方について十全な根拠を示しながら編年問題を一人で議論することは不可能であろう。若干例を参考に示しておきたい。

Amiet はエジプト第Ⅲ王朝の成立を前2700年よりやや古く位置づける編年に賛同し、メソポタミア初期王朝2期を前2700—2600年と考えた[1977]。勇気のある James Mellaart は一人で双方の編年問題を検討して、エジプト第Ⅲ王朝を前2950年に、メソポタミア初期王朝2期を前2900—2780年と算定した[1979]。

やや古い研究も含まれているが、1992年に刊行された先史時代および古代の総合的編年学の成果によると、それぞれ別の研究者が、エジプト第Ⅲ王朝の始まりを前2750年頃に置いている[Kantor 1992]のに対して、メソポタミアでは初期王朝2期に当る時期を初期王朝1期後半と呼びかえ、前2750—2600年と想定している[Porada et al. 1992]。ただし Porada 等は、本論で重要な位置を占める Tell Asmar の方形神殿Ⅱおよび Khafajah の Nintu 神殿Ⅴを初期王朝1期後半、すなわち従来 の 2 期に、Nintu 神殿Ⅵを初期王朝Ⅲ A 期と考える。なお詳細な検討を必要とする問題である。

さらに Tell Asmar の方形神殿Ⅱと Khafajah の Nintu 神殿Ⅴから発掘された彫像類が、メソポタミア初期王朝2期のなかで古いものか新しいものかの、すなわち2期の編年的細分を行いそれぞれの遺物の妥当な位置づけを求めなければならない。歴史的に重要な変化を問題にするとき、150年や100年を一時期に括って議論するのは現在では少々荒っぽ過ぎるように考える。

## 図の出典

1. Stevenson Smith 1958, pl.15(A)/2·3. Amédée Ozenfant *Les Antiquités égyptiennes du Musée du Louvre* (*Encyclopédie photographique de l'art* I), 1936, p.6/4·5, Frankfort 1943, pls. 82·8/6·7·8·9, Parrot 1967, pl. LVIII, fig. 203, pl.LV/10, Woolley 1955, pl. 40.

## 参考文献

- Aldred, Cyril(1980) *Egyptian Art in the Days of the Pharaohs 3100–320BC*. London.
- Amiet, Pierre(1977) *L' Art antique du Proche-Orient(L' Art et les Grandes Civilisations)*. Paris.
- Childe, V. Gordon(1952) *New Light on the Most Ancient East*. London.
- Frankfort, Henri(1936) *Progress of the Work of the Oriental Institute in Iraq, 1934/35*. OIC 20, Chicago.
- Frankfort, Henri(1939) *Sculpture of the Third Millenium B.C. from Tell Asmar and Khafajah*. OIP 44, Chicago.
- Frankfort, Henri(1943) *More Sculpture from the Diyala Region*. OIP 60, Chicago.
- Frankfort, Henri(1951) *The Birth of Civilization in the Near East*. Bloomington.
- Frankfort, Henri(1954) *The Art and Architecture of the Ancient Orient, (The Pelican History of Art)*. Harmondsworth.
- Hall, H.R. & C.Leonard Woolley (1927) *Al-'Ubaid (Ur Excavations I)*. London.
- Helck, Wolfgang (1971) *Die Beziehungen Ägyptens zu Vorderasien im 3. und 2. Jahrtausend v. Chr. (Ägyptische Abhandlungen, Bd. 5, 2. Auflage)*. Wiesbaden.
- Kantor, Helene J. (1992) *The Relative Chronology of Egypt and its Foreign Correlations before the First Intermediate Period*, in Robert W. Ehrich (ed) *Chronologies in Old World Archaeology* (3rd ed). Chicago.
- Lenzen, H.J. (1960) *Vorläufiger Bericht über die von dem Deutschen Archäologischen Institute und der Deutschen Orient-Gesellschaft aus Mitteln der Deutschen Forschungsgemeinschaft unternommenen Ausgrabungen in Uruk-Warka* 16. Berlin.
- Mellaart, James (1979) *Egypt and Near Eastern Chronology : a Dilemma?*. *Antiquity* 53.
- ミハエリス, A. (濱田耕作訳) (1927) 『ミハエリス氏美術考古学発見史』岩波書店.
- Moortgat, Anton (1965) *Tell Chuëra in Nordost-Syrien : Bericht über die vierte Grabungskampagne* 1963.

Köln.

Moortgat, Anton (1967) *Die Kunst des Alten Mesopotamien*, Köln.

村田数之亮(1974)『ギリシア美術』新潮社.

小野山節(1962) Mesopotamia における帝王陵の成立『西南アジア研究』8.

小野山節(1963) Ur「王墓」の被葬者は王か、聖なる結婚の主演者か『西南アジア研究』10.

小野山節(1966) 王陵 浅香正・加藤一郎(編)『オリエント・地中海世界 I』(『世界歴史』第2巻) 人文書院.

小野山節(1975) メソポタミアの美術 I —紀元前6千～前2千年紀— 新規矩男(編)『古代西アジア美術』  
(大系世界の美術2) 学習研究社.

Orthmann, Winfried (1975) *Der Alte Orient (Propyläen Kunstgeschichte, Bd. 14)*. Frankfurt am Main.

Parrot, André (1948) *Tello : Vingt Campagnes de Fouilles (1877—1933)*. Paris.

Parrot, André (1956) *Mission archéologique de Mari(I) : Le temple d' Ishtar*. Paris.

Parrot, André (1960) *Sumer (L' Univers des Formes)*. Paris.

Parrot, André (1967) *Mission archéologique de Mari(III) : Le temples d' Ishtar et de NINNI—ZAZA*. Paris.

Parrot, André (1981) *Sumer (L' Universe des Formes) (Nouvelle édition)*. Paris.

Porada, Edith, Donald P.Hansen, Sally Dunham & Sidney H.Babcock (1992) *The Chronology of Mesopotamia, ca. 7000—1600B.C.*, in Robert W.Ehrich (ed) *Chronologies in Old World Archaeology*, (3rd ed) .  
Chicago.

Speiser E.A. (1941) The Beginning of Civilization in Mesopotamia. *Antiquity* 15.

Stevenson Smith, W. (1958) *The Art and Architecture of Ancient Egypt (The Perican History of Art)*. Harmondsworth.

Strommenger, Eva (1964) *The Art of Mesopotamia*. London.

Vandersleyen, Claude (1975) *Das Alte Ägypten (Propyläen Kunstgeschichte Bd. 15)*. Berlin.

Vandier, J. (1958) *Les Grandes Époques : La Statuaire (Manuel d' archéologie égyptienne III)*. Paris.

Woolley, Leonard (1955) *The Early Periods (Ur Excavations IV)*. London & Philadelphia.

(京都大学)